

タスキージ学院におけるエクステンション活動

——南部黒人大学による地域開発教育——

成 玖 美

Studies in Humanities and Cultures

No. 3

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 3号
2005年1月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
JANUARY 2005

タスキーギ学院におけるエクステンション活動

—南部黒人大学による地域開発教育—

Extension at Tuskegee Institute:

Community Development Education by a College for African-Americans in the South

成 玖 美

SUNG, Koomi

要旨 アメリカの大学が地域サービスを重視しながら大学エクステンションを発展させてきたことはよく知られている。しかし南部黒人集住地域の地域開発に寄与した黒人大学のエクステンションについては、従来、等閑視されてきた。本稿は19世紀末から20世紀にかけてのタスキーギ学院におけるエクステンション活動を、地域開発教育の視点から検討するものである。タスキーギ学院は、タスキーギ黒人会議および地区会議ネットワーク、および数種の農業技術指導講習会を通して、農村生活改善に尽力した。また家庭を支える女性の役割を重視し、母親集会やセツルメントなどを通して、女性の意識向上に努めた。さらには地域図書館設立や農村公立学校の改善指導など、さまざまな形で地域開発教育を展開した。こうした実践は、学習機会が圧倒的に乏しく、差別の厳しい環境における切実な地域開発教育実践として評価されると同時に、体制内改良主義的教育としての限界をも持つ。それは現代多文化主義教育が構想される以前の、「近代」マイノリティ成人教育の光と影を示していよう。一方で、タスキーギ学院のエクステンションは、大学の専門性の地域還元という性格だけでなく、より幅広い対象へのアプローチを展開させており、地域開発の総合的教育機関としての役割を担っていたとも解される。地域開発を梃子として人種の地位向上を目指した、南部農村地域における黒人大学エクステンションの歴史的な性格を、検討する。

キーワード : 大学エクステンション、タスキーギ学院、地域開発教育、アメリカ南部、
アフリカン・アメリカン

はじめに

本稿は、19世紀末から20世紀にかけてのタスキーギ学院におけるエクステンション活動を、地

域開発教育の視点から検討するものである。

アメリカの大学は、住民ニーズに即した実用主義的プログラムと地域サービスを重視しながら、そのエクステンション活動を発展させてきた。とくに研究者の注目を集めてきたのは、アメリカ大学エクステンションの発展に主導的役割を担ったとされる、北中部のウィスコンシン大学やシカゴ大学の歴史的意義であり、その実践や指導者の理念については、日本でも着実に研究が進められてきた¹。

その一方で、南部に位置する大学、とりわけ黒人大学におけるエクステンションに関しては、これまで正当な関心が向けられてきたとはいえない。本稿が対象とするタスキーギ学院は、1881年に南部アラバマ州に黒人師範学校として設立された黒人大学である²。学院の位置するアラバマ州ブラックベルトは綿花栽培地帯であり、黒人の集住地域として知られる。人種差別と低開発状況にある南部黒人農村、それが学院の舞台であり、住民の多くはシェアクロッピング制度下の小作人であった³。多くの家族は一部屋しかない小屋に暮らし、南北戦争後制度化された黒人学校も必要な調度品を欠き、3ヶ月以上授業を継続することが困難であったとされる⁴。

こうした地域にあって、学長ブッカー・ワシントン (Booker T. Washington、以下、ワシントンと表記) は、赴任当初から地域住民の貧困、衛生状況、家族生活などに関心を持ち、「この学校を、その地域社会と無縁なものではないようにしよう」⁵と、エクステンション活動に精力を傾けた。本稿は、タスキーギ学院のエクステンション活動の描写を通して、従来のアメリカ大学エクステンション研究が見過ごしてきた側面に光を当てつつ、その歴史的 성격について論じていく。

尚、対象とする年代は、ワシントンが生存中 (学長時代) の1881年から1915年とする。また、参照する史料の多くは、学院発行の便覧などの一次資料である⁶。

1. 農民の学び

(1) タスキーギ黒人会議

ワシントンは赴任当初から、インフォーマルに周囲の地域を見て回り、南部黒人農民の生活実態を認識し、生活改善のアドバイスを 행っていた。そうした活動が学院の事業として最初に位置づけられたのは、1888年に農場担当者を雇用し、農民クラブと講座の組織化を始めた時点である。しかし、農民の出席は、はかばかしくなかった。その理由を知るべく1890年から月に一度、学院に少数の農民を集めて話を聞く機会を設けたところ、農民たちが教育を受けた人と同席することに抵抗を感じていること、また学院までの通学が困難であることなどの問題点が見えてくる。それは、伝統的な学生を対象とした教授方法を農民たちに適用することの、困難を意味した。

これを契機に、ワシントンや教師たちは農機具や作物の種などを積んだ馬車 (後に自動車) による、農民の家や農場、教会などでの巡回指導を開始する。こうした活動は後に連邦農務省の目に留まり、「農業協同デモンストレーション事業」に組み入れられ、制度化されていくことにな

る⁷。学院は1910年に正式なエクステンション部門を設け、それまでの様々なエクステンション活動を組織化させており、アメリカの大学エクステンションの発展時期と照らし合わせても、その動きは先進的なものであったといえる。

さらに、学院と地域住民をつなぐ重要な事業として開催され、以後毎年規模を拡大させながら継続していくのが、1892年2月から開かれたタスキーギ黒人会議（Tuskegee Negro Conference）である。これは、郡内の農民・職人・教師・牧師らが年に一度学院に会し、地域の現状を語り合い、課題を共有しあう集会であった。会議は後に、農民会議と労働者会議の二日間に拡大し、後者では農民会議の議論を受けて、両人種の教師や牧師、地域のリーダーなどによる、より深い議論がおこなわれるようになっていく。

では、会議はどのように進行したのか。当時の記録によると、会議はまず、農園で歌われた古いメロディーの合唱から始まる。次に短い祈りが捧げられ、ワシントンが会議の開催を宣言する。ワシントンは参加者を心から歓迎し、親しげで気取らない態度で接したと記されている⁸。ほとんど無学の農民たちが学院のキャンパスに会する状況において、場の雰囲気や和ませ、黒人としての共感を高めることが意図されていたと思われる。

会議の午前中は、各地からの代表者に対して具体的な質問がなされた。「農場を所有している者と土地を借りている者の人数は？」「学校に校舎はあるか？」「授業がおこなわれている期間の長さは？」「教師の質は？」「牧師の質は？」などといった質問により、黒人農村の現実があぶりだされていく。さらに午後は午前中の話を受けて、状況の改善策について参加者と議論された。その際、ワシントンらが高い見地から指導したり講義したりするのではなく、農民自身の失敗と成功の経験を語りあうことが重視されたという⁹。

翌年の第2回会議では、前年の会議以降に現実的改善が得られたかどうか、農民自身によって報告されている。人々の労働意欲や学校改善などに変化が見られないという報告がある一方で、学校が7～8ヶ月に延長されたところでは人々が借金を返して家や土地を買うようになっているという報告もあり、地区によって差が見られる。その他、綿花以外の食料や家畜など、自宅で消費できるものを育ててシェアクロッピング制から抜け出す方法や、二部屋の小屋を安く建てる方法、学校の授業期間を長くする取り組み、黒人女性の処遇改善の必要性などが議論されている¹⁰。

こうしたタスキーギ黒人会議の意義はどこにあったのだろうか。第1回会議のチラシでは、その目的を①産業・モラル・教育面における大衆の実際の状況を知ること、②タスキーギ学院などに通う若者たちが黒人大衆の向上を援助するための最適な育方法を探ること、と記している¹¹。しかし一連の会議は、学院関係者が住民のニーズを把握して学生教育に反映させるという当初の目的だけでなく、相集う農民たち自身が相互に学びあう場としての性格を強くすることで、後の発展を支えていったように思われる。

(2) 地区会議

タスキーギ黒人会議を充実させたのは、地区会議 (Local Conference) の存在であったと言える。年に一度の会議では、農民たちへのアプローチは不十分ならざるを得ない。そこで学院は、各地区で学校建設やコミュニティの生活改善について話し合う会議を開くよう動機づけるため、会議エージェントと呼ばれる職員を雇用している。会議エージェントの役割は、各地区を回り、一軒一軒の家を訪ねながら、会議への関心を促し、各地区での会議の組織化を支援することであった。地区会議は多くの場合、その地区に住む住民であり、かつタスキーギ黒人会議に出席経験のある人物が座長として選ばれて、会議エージェントのサポートを受けながら、維持されたようである¹²。

さらに年に一度のタスキーギ黒人会議には、この地区会議から選ばれた代表者が出席した。そして代表者が学んだ内容は、各コミュニティに持ちかえられ、地区会議のメンバー内で共有された¹³。ある地区会議の座長となった農民は、次のように書いている。

「私と息子は、タスキーギ黒人会議を楽しみにしており、それによっていろいろ助けられています。家に帰ると、私は会議で学んだことのいくつかを実践しています。私の地区の人々に、二度、話をする機会がありました。私は彼らに、土地を買い、校舎と教会を改善し、人頭税を払うように促しました。私たちの郡の教育長は、私がスピーチをした教師講習会に出席し、私が話したことを喜んでくれました。この地区の人々は子どもの教育について十分な関心をもっていません。しかし、わたしたちはその必要性をわかってもらえるよう、全力を注いでいます。」¹⁴

各地区会議を維持し、タスキーギ黒人会議の求心力を高めていたのは、こうした忠実で勉強熱心な農民たちだったのだろうと推察される。またタスキーギ黒人会議への準備と動機付けを図って、学院は各地区会議に対して事前に、調査項目リストを配布することもあった。表1は、1908年のリストの内容である。

このリストには、「学校」「家庭」「農業」「モラル」と農民の生活全体にわたる関心が示されており、学院のエクステンションを支えた価値観が如実にあらわれていて興味深い。こうした調査を積み上げながら、地区会議と親会議としてのタスキーギ黒人会議、そしてそれをつなぐ会議エージェントと地区会議の座長というシステムによって、生活改善メッセージの効率的普及が図られたのであった。

表1 地区会議における調査項目リスト (1908年)

「公立学校について」	
1.	校舎の状況
2.	授業期間
3.	教師の状況
4.	教師・牧師・後援者の協力状況
5.	教師と牧師の給料
「家庭について」	
1.	家の購入と支払い状況
2.	妻たちの家庭での働きぶり
3.	家が子どもにとって快適で魅力的で興味深いものになっているか
「農業について」	
1.	所有物の総額
2.	育てている作物の種類
3.	豚、家禽、卵など、家庭で消費できるものを育てているか
4.	夫が用事のあるふりをして農園の仕事を妻や子どもに任せることがあるか
5.	農地の所有者は自分の子どもに継がせるためどれくらい仕事を教えているか
6.	自分の土地の所有は確実なものになっているか
7.	妻や子どもは仕事の状況を理解しているか
8.	銀行口座をもっているか
「モラルについて」	
1.	男性はウィスキーやギャンブルにどれくらいお金を使っているか
2.	女性がまちをうるついたりしないようにどんな努力がなされているか
「学校や大学の地域生活改善への取り組みについて」(*労働者会議に備えた質問項目)	
1.	教師の個人的または組織的努力
2.	学生の個人的または組織的努力
3.	学校全体による努力
4.	学校・大学教育をサポートするよう地域を駆り立てるためには

出典：The Tuskegee Student, Vol.20, No.6, February 8, 1908

(3) 農業技術指導

タスキーギ黒人会議が農民の生活全体にわたる改善を議論したのに対し、農業講習会 (Farmer's Institute) は、より具体的な農業技術指導を目的としていた。農業講習会とは、すでに国内で成人農業教育の一形態として展開されていたものであるが、学院では1897年11月から、カーヴァー (George Washington Carver) の指導の下に始められている。具体的には、毎月ミーティングが開かれ、「土壌の管理」「輪作」「肥料」「農作物の価格」「市場」といったテーマの講義や実地指導がおこなわれた。1908年3月の報告によると、この月のミーティングには50人以上の農民とその妻や子どもが参加している¹⁵。また、農業講習会の成果発表の場として、年に一度、学

院構内でフェアが開かれ、家畜や作物のサンプル、縫い物などが展示された。

さらに農業講習会を充実させる目的もあって、1903年からは4～6週間の短期農業コースも開かれている。これは農閑期の冬に集中的に農業指導を行うもので、朝から夕方まで、講義と実習によって構成されていた。1907年の報告では、参加者は70人で、うち女性が8人おり、15人が夜間コースに参加したと記されている。またこの年、連邦農務省の研究者が2週間にわたって参加したと記録されている¹⁶。そのほかにも、農業サマースクールや2週間の農業学校など、さまざまな形態での農業技術指導がカーブナーを中心として重層的に展開され、黒人農民の学びの場として高い評価を集め、連邦農務省との協同事業実現に結びつく基礎を築いていった。

2. 女性たちの学び

(1) タスキーギ女性クラブ

次の引用は、1903年、アラバマ州を訪れたサンフランシスコの記者が見た、黒人農民の生活の描写である。

「・・・部屋と呼べるものもない、窓さえもない、太陽光と風がぼろぼろの四方の壁の割れ目から差し込む小屋で、5～6人の人間がめったに水を避けることのない屋根の下にひしめいている。シーツと枕のあるベッドは、ガラスのはまった窓と同じくらいめったに見かけることはなく、家族はわずかの衣服を脱ぐ手間も惜しんで、古い布の被いの間を這いずっている。」¹⁷

記者は、こうした状況を克服し「清潔できちんとした換気のよい住居」の実現に力を注ぐ人物として、マーガレット・ワシントン (Margaret M. Washington, 以下、マーガレットと表記) を紹介している。学院のエクステンション活動を検討するにあたって、彼女の存在は重要である¹⁸。

彼女は夫と同様、黒人住民、特に女性の向上に関心を持ち、多くのエクステンション活動をおこなった。その拠点となったのが、1895年に創設されたタスキーギ女性クラブ (Tuskegee Women's Club) である¹⁹。コミュニティの貧しい女性たちの生活改善に寄与することが活動目的であり、学院の女性教師や教師の妻などで構成された。初年度の会員は35人、10年後の報告では75人に増えたと記録されている²⁰。

そもそも、マーガレットが女性たちへのエクステンション活動の必要を感じたのは、第1回のタスキーギ黒人会議がきっかけであった。彼女は多くの女性が会議に参加していながらも、夫や息子の熱心な議論に対してどこか関心なさそうな表情を見せていることに気づいた。それは、生活改善や黒人全体の発展に果たす自分たちの役割を女性たちが実感できなかつたためであると、彼女は後に書いている²¹。

(2) ラッセル農園セツルメント

タスキーギ女性クラブの援助活動として代表的なものの一つが、1897年からラッセル農園でおこなわれたセツルメント活動である。ラッセル農園は学院から8マイルほど離れた場所にあり、30ほどの家族が暮らしていた。マーガレットは定期的に農園の小屋を訪れ、困難な状況からどのように改善したらいいのかを話し、また家族のために家を整頓するよう促した。

さらに彼女は子どもたちのための学校が必要であることを実感し、農園内に学校をつくることを提案した。彼女が農園主から借りた一部屋の小屋が学校となり、教師として学院の卒業生であるデイヴィス (Annie Davis) が住みこんだ。この小屋は授業や集会の場となっただけでなく、デイヴィスが暮らすことで、家の整頓の仕方を示す場ともなった。また学校では読み書き算だけでなく、隣の農地で野菜などが育てられ、家事や、家の周りの手入れなども教えられた。また料理や裁縫のクラスや母親組織もつくられ、クリスマスやイースターの行事や日曜学校も開かれた。1905年の報告によると、学校への平均出席人数は53人で、母親集会には24人、日曜学校には130人の大人と子どもが参加したとされる。

学校は最初、マーガレットの北部の友人や学院の教師たちの資金でサポートされていた。子どもたちの親は、お金を払うことはできなかったが、自分のできることで貢献しようという姿勢を見せ、数年後には、少しでも毎月の授業料を払おうとする者も出てきたという。1904年には、学校は公立学校システム下におかれ、デイヴィスは月15ドルを郡から得ることとなった。

その他、ラッセル農園にはボーイズクラブや男性のための新聞購読クラブなどもつくられたと記録されている²²。先述のサンフランシスコの記者は、この地区の住居は他の地区の黒人の住居よりも優れており、ベッドや床はきれいに整えられ、屋根や壁は修繕され、多くの場合2部屋以上が存在すると書いており、ラッセル農園の生活改善活動の成果がうかがえる。

(3) 母親集会

マーガレットはまた、各地区に母親集会 (Mother's Meetings) を組織した。この試みは、土曜の朝に農民たちが商売のために夫婦で市場にやってくるのにあわせ、町の古い商店の2階で開かれたのが最初であった。マーガレットの記述によれば、恥ずかしそうに入ってくる女性たちに対し、彼女は気持ちを楽しめるよう促し、「この国の女性が何を必要としているのか、お互いに助け合うためにはどうしたらいいのかを話し合う場です」と話したという。内部の二部屋のうち一部屋にはコンロとベッドが置かれて実習に使われ、もう一部屋は集会室として使われていた。

母親集会の一番の目的は、黒人女性が自分や家族に対する関心を持ち、家族の生活向上に果たす母親の役割を認識し、それに伴った行動を動機づけることであった。ある日「自尊心」というテーマで話したマーガレットは、「私たち自身が自分たちを尊敬しなければ、白人たちに私たちを尊敬するように望むことなどどうしてできるでしょう」と語りかけている。そのほか、「家族

の健康」「適切な服装とふるまい」「家計と家や土地の所有」「女性の役割」「黒人としてのプライド」などがテーマとして話された²³。家族の絆とモラルを守る要としての母親の役割が強調されていたことがうかがえる。

一方、母親たちが話し合いをしている間、子どもたちのためのプログラムも用意されていた。1907年の記述では、50人の子どもが、簡単な勉強や道徳的なお話を楽しみ、また小さな図書室も設けられ、絵本や簡単なゲームが準備されていたという²⁴。女性の学習機会促進に欠かせない託児施設が、早くも備えられていたことがわかる。

母親集会の動きは他の地域にも影響を広げ、タスキーギの母親集会に参加している女性が他の地域の母親集会にかかわることもあったという。1913年の記録によると、アメリカに500以上のグループがあったとされる。マーガレットは母親集会の進め方について、集会日の少なくとも2週間前には、次の集会で話し合う話題を母親たちに伝え、その問題について考える時間を十分与えるよう提案している²⁵。単に先進的な情報を一方的に得る場ではなく、平場の関係で、各自の意見を披瀝しあいながらの学びの方法論が、試みられていたようである。

1905年の報告によると、計28回の集会在土曜の午後2時から5時まで開かれており、1回の集会には平均50人の女性が出席した²⁶。1907年の記述では、会員は229人とされており²⁷、母親集会の拡大ぶりがうかがえる。マーガレットは知人への手紙の中で次のように書いている。

「母親たちがこれらの集会によって彼女らの家庭でどれだけ元気づけられているかわかりません。…この秋に開いた集会で参加者が50人から60人を下回ったことはありませんでした。昨日まで雨が1週間続きましたが、それでも2人の女性が7マイルも離れたところからやってきました。母親集会は、彼女らにとって一筋の光なのです。」²⁸

(4) クラブの性格

タスキーギ女性クラブは、困窮者への援助組織という性格と、クラブ員にとっての知的交流の場としての性格の、二つを兼ね備えていた。1905年の報告によれば、孤児院の浮浪児や学校、貧窮している人々に対する金銭的援助や、不健康な環境に置かれている子どものための住居探しへの貢献などが報告されている一方で、クラブの週2回のミーティングでは、「一流の黒人音楽家」「X線の価値」「無線電信」「現在の有名な女性」「最近の記事のレビュー」などが話題となったと記されている。そのほか、音楽や朗読のプログラムや講演などもおこなわれており²⁹、黒人中流階級の女性たちの知的関心の高さが、うかがえる。

さらに、クラブの中にはいくつかの委員会が形成されたが、女性参政権に関する議論が高まる中、クラブでも女性参政権担当部門が研究会をおこなった。しかし南部の制限的参政権の現状のなかで、その活動は实际的というよりは学問的な検討にとどまるものであった³⁰。

このように、タスキーギ女性クラブはいくつかの方法でコミュニティの生活改善に取り組んだが、それら一連の活動は、中流階級の女性たちによる貧困層への援助という慈恵的な性格が強かった。またそこでは、家庭を支える「母親」像が重視され、中流階級家庭の白人女性をあるべきモデルとして理想化している感も強い。その姿勢は同時代の、反リンチ運動を展開した女性運動家や、職業人としての女性の自立を説いた黒人女性たちとは、一線を画すものであった。

3. 教育機関の改善とリーダー育成

(1) 夜間学校と図書室

さらに、学院は教育機会の普及と質の向上に向け、いくつかの取り組みをおこなっている。1899年、学院はタスキーギの町に、住民夜間学校（Town Night School）を開設した。これは、日中の学校に通うことが困難な若者のための学校で、学業以外に、男性はれんが造りや大工仕事など、女性は料理や裁縫などの実業を教えていた。タスキーギ学院の教育方針がここでも貫かれていたといえる。また、この夜間学校でのコースを修了すると証明書が授与され、タスキーギ学院の師範コースの第1学年に入学することが認められていた。

1905年4月の報告で116人、1909年8月の報告では、6月と7月の夜間学校に500人以上が参加と、学生数を増やしている。また1909年8月の報告によると、16人の教師と、補助教員として学院を卒業した5人が指導にあっている³¹。

さらに読書の機会拡大のため、町に図書室を開いて住民の利用に供した。ほとんどの本は、学院の図書館や学院の友人たちから集められた寄付であった。農村住民たちは、土曜日に町の市場に農作物を売りに来た帰りに本を借りて帰り、この図書室を利用したと記されている³²。

(2) 公立学校改善

当時の南部黒人公立学校は、人種隔離制度の固定化の時代にあり、公的予算配分において白人学校との格差が広がっていた³³。学院では、こうした公立学校の状況に寄与すべく、農村学校エクステンション（Rural School Extension）を1905年から始めている。専門のスーパーバイザーが雇用され、郡内の公立学校を巡回して、校舎の改善、授業時間延長の取り組み、学校農園の管理指導などが各学校の教師に対しておこなわれた。また、農村の学校を回る移動図書館もつくられ、教師用の専門書と、子ども用の本が農村の学校に運ばれた³⁴。

また、学院の卒業生や元学生たちの多くは各地の学校の教師となったが、学院は彼/彼女らとできるだけ連絡をとり続け、学院の理念を地域で実践するよう動機づけるため、専門の職員を雇った。1905年の報告によると、この専門職員はこの年、1200マイルを旅し、卒業生や元学生によって建てられた14の学校を訪れている³⁵。学院の新聞には、学校を建てた卒業生や元学生からの手紙が多数掲載されているが、学院の理念を受け継ぎ、いわゆる教科科目だけでなく、実業教

育を重視していることがわかる。また多くの学校で、母親集会、農民会議、夜間クラスなど、地域住民へのエクステンション活動が実施されていたことも、うかがい知ることができる³⁶。

さらに、学院には設立まもなくの頃から、郡と学院によって建てられたChildren's Houseと呼ばれる公立小学校が設置されていた。この学校は学院の学生の教育実習の場ともなっており、学校の卒業生は学院のA予備クラスに入学することができた。また小さな畑をもち、基本的な農業の知識も教えられていた。併設された幼稚園でも「季節の変遷の中での人々の暮らし」を伝えることが重視されており、ここでも農村生活と教育を結び付けようとする意図がうかがえるのである³⁷。

また子どもたちの母親によって「母親向上クラブ (Mothers' Improvement Club)」が組織され、学校改善に取り組んでいた。具体的には教室やグラウンドの美化が第一目的であり、そのための資金集めとしてバザーもおこなわれている。バザーでは子どもたちのスポーツの試合や寸劇なども披露され、地域の人々に参加が呼びかけられていた。Children's Houseは学校改善モデルとしての役割を担うと同時に、地域交流の場としても活用されていたようである。

(3) リーダー研修

地域生活改善にとって、教師や牧師など、リーダー的役割を担う者たちの質的向上も重要である。その一環として、学院では年に4回、郡内の教師と学院の教師が集まる教師講習会 (Teachers' Institute) が開かれていた。教室運営についてだけでなく、各地域の生活ニーズや学校農園の管理方法などについても議論され、学校が地域にどのように貢献すべきかを相互に議論する場となった³⁸。

また学院では、教師のためのサマースクールも開かれた。1910年6月20日～7月15日のサマースクールパンフレットによると、サマースクールの目的は、①各教科に関する教師の知識を高める (教師免許の級昇格も可能)、②実業科目の研修、③教室運営・コミュニティ改善・コミュニティの生活や産業と学校を関連付ける方法・実業や農業技術を学校カリキュラムに取り入れる方法の研修、となっている。また1915年のパンフレットによると、木曜の夜は音楽や芝居などの余興が企画されており、サマースクールが単なる研修の場としてだけでなく、教師たちにとっての娯楽の場ともなっていたことがうかがえる³⁹。

さらに、当時の黒人コミュニティにとって黒人教会や牧師の存在は大きな影響力をもっていたが、黒人牧師のなかには十分な教育を受けず、宗教的知識も不十分な者も多かった。こうした状況もあって、ワシントンは学院設立当初から牧師教育の必要性を感じ、1893年にはバイブルスクールを学院に開き、同年夏にはサマースクールも開いている。さらに郡内と近隣地区のすべての牧師によって、牧師協会 (The Ministers' Association) が組織され、年に4回学院に集まり、宗派を超えて、地域の生活改善のために話し合われた。

4. 地域開発教育としての歴史的 성격

以上のように、タスキーギ学院のエクステンション活動は、地域住民に広くサービスをおこなうというアメリカ式エクステンションの一例である一方で、北部の代表的大学のそれとは異なる「アウトリーチ」の理念を強くもった実践であつたいえよう。地域の貧困や低開発状況の把握を出発点として、それに現実的に応える方法が求められ、その延長上に黒人の地位向上への道筋が定められていた。

いま、こうした学院のエクステンション活動を、開発途上地域における地域開発教育の一例として把握しようとするとき、どのような性格付けが可能であろうか。

まず第一に、それは経済的自立を重要な目標とする教育実践であつた。学院が発行した新聞などには、黒人農民からの手紙や報告が多数掲載されている。その内容は「貯金を始めた」⁴⁰、「土地を入念に準備するようになった」「複数の作物を栽培するようになった」「借金を返してシェアクロッピング制から抜け出した」⁴¹など、農業技術の向上と経済的安定を伝えるものが多い。学院のエクステンションは、各家庭で消費できる食物をつくったり、すべての黒人が自分の家と農場をもったりといった、自営農民としての自立を、地域開発の要とするものであつたといえる。

そして第二に、自営農民としての自立は、モラルの改善と分かちがたく結びついて実現されると考えられていた。一連の会議では、「土曜日に町をうろつくような時間と金の無駄遣いをしない」「誘惑に負けず、より学校・教会・教師・聖職者であり続ける」といったモラルの問題も、繰り返し強調されている。こうした主張は、自助的生活改善を訴える1830年代以降の社会改善運動の主張と、ほとんど変わらない。

モラルの強調は、タスキーギ女性クラブの取り組みにも顕著であつた。黒人女性史家のCashは、黒人女性クラブ運動が求めた価値観を、ビクトリア時代のそれのような、厳格で上品ぶつたものであつたと表現する。「道徳的」で「立派」で「性に対して控えめ」であり「清潔」で「きちんとしている」こと、それが彼女らの求めた女性の姿であつた⁴²。また、モラル改善の礎として「家庭」が注目され、そして「家庭」を支える「母親」役割が、重視されたのである。

第三に、こうした性格はその帰結として、社会改革ではなく、(体制内)改良主義を標榜する実践となつた。彼はタスキーギ黒人会議について第1回会議のチラシに次のように書いている。

「政治家やいわゆる「黒人リーダー」のための会議ではなく、人種の骨と筋肉である大衆の代表、つまりごく普通の勤勉な農民と、何人かの優れた牧師と教師による、穏やかな会議である。」⁴³

彼は黒人に対するリンチや様々な差別が問題となつても、それを「南部の反映を後退させる」⁴⁴と批判しつつも、あくまで白人の良心に訴えて事態の改善を求めることを優先した。一方で黒人

大衆に対しては、モラルや法を遵守し、有用な合衆国市民とならねばならないと訴えるのが流儀であった。彼はこうも書いている。

「われわれはこの会議を、最初から、国や人種全体で改善すべき問題というよりは、自身自身の力で改善できる問題に焦点を当てて議論することにこだわった。」⁴⁵

こうした自助努力による人種問題へのアプローチは、タスキーギ学院におけるエクステンション活動全体、ひいてはタスキーギ学院の教育実践全体に共通する思想であった。それは黒人解放運動の文脈にそって見るとき、白人主流文化への同化と啓蒙という思想的限界を包含している。

しかしそれを成人教育実践の発展過程という文脈において捉えたとき、学院のエクステンション活動は、「近代」成人教育の発展段階における歴史的典型として、理解される。体制内改良主義は、あらゆる近代国家の形成と成人教育の関係において出現する、理念的・実践的形態である。学院の実践は、学習機会が圧倒的に乏しく、差別の厳しい環境における切実な地域開発教育の事例であったとして、その歴史的な性格をひとまず捉えておきたい。

最後に強調しなければならないのは、学院のエクステンション活動は、学校や大学が地域生活改善に多大な影響力を果たすという、地域開発ビジョンに裏付けられていたという点である。それは、大学の専門性を地域に還元するという大学エクステンションの常道に収まっていない。貧困層の生活改善から教育機関の普及、そしてリーダー育成まで、幅広い対象への多様なアプローチを包含する、地域の総合的教育機関としての性格を帯びていたというべきであろう。

中條献はかつて、ノースカロライナ州の黒人大学であるショー大学を事例に、同大学が地域社会に幅広く大きな貢献をしていたことを指摘した⁴⁶。タスキーギ学院もまた、それと同様の傾向を示しており、それが南部黒人地域社会における黒人大学エクステンションのあり方として、普遍性を持つものであったとも解される。これは、従来の大学エクステンション像にはなかった視点であり、南部黒人大学エクステンションの独自の社会的機能として、新たな知見を提供することとなる。

1. 主なものに、小池源吾「シカゴ大学における大学拡張の定着過程に関する研究」『日本社会教育学会紀要』No. 16, 1980。／五島敦子「ヴァン・ハイズの大学拡張構想」『日本社会教育学会紀要』No. 36, 2000。など。
2. 正確には、タスキーギ学院は「大学」ではないが、黒人土地供与大学のひとつに数えられるなど、当時の黒人教育体系においては高等・専門教育の役割を担った。
3. これは、農機具・家畜・肥料・小屋・食料などの必要物資を小作人が労働力を担保として地主から買い受ける制度で、現金収入はほとんど得られず、毎年のように借金を増やすものも多かった。
4. Louis R. Harlan ed. *Booker T Washington Papers*, (以下、*BTW Papers*) vol.3, University of Illinois Press, 1974, pp.209-210.

5. ブッカー・T・ワシントン『奴隷より立ち上がりて』[*Up From Slavery*; Bantam Books, 1901] 稲澤秀夫訳、中央大学出版部、1978、p. 122.
6. 以下、*Catalogue of the Tuskegee Normal and Industrial Institute* (以下、*Catalogue*) , 1909-1910, pp.97-100、及び*Catalogue*, 1910-1911, pp.92-95における活動一覧、*The Tuskegee Student* (以下、*T.S.*) , vol.17, April 28, 1905における説明を適宜参照した。さらに、タスキージ学院におけるエクステンション活動の先行研究として、Felix James, "Booker T Washington and George Washington Carver: A Tandem of Adult Educators at Tuskegee" <Harvey G. Newfeldt and Leo McGee eds., *Education of the African American Adult: An Historical Overview*; Greenwood Press, 1990.> / Virginia Lantz Denton, *Booker T Washington and the Adult Education Movement*, University Press of Florida, 1993, pp.109-132 / B.D.Mayberry, *The Role of Tuskegee University in the Origin, Growth and Development of the Negro Cooperative Extension System 1881-1990*, Tuskegee University, 1989, pp.63-67などがある。
7. 詳しくは、成玖美「タスキージ学院における農業拡張制度化過程」『生涯学習・社会教育研究』第25号、2000を参照されたい。
8. *BTW Papers*, vol.3, pp.294-299 / Thomas Monroe Campbell, *The Movable School Goes to the Negro Farmer*, Arno Press & New York Times, 1969. (初版Tuskegee Institute Press, 1936) p.83.
9. Louis R. Harlan & Raymond W. Smock, eds. *BTW Papers*, vol.5, 1976, pp.95-101.
10. *BTW Papers*, vol.3, pp.294-299.
11. *Ibid.*
12. *The Southern Letter*, (以下*S.L.*) vol.22, No.9, September, 1906.
13. *T.S.*, vol.20, No.2, January 11, 1908.
14. *S.L.*, Vol.23, No.6, June, 1907.
15. *T.S.*, vol.20, No.12 & No.16, 1908.
16. *S. L.*, vol.23, No.2, February, 1907.
17. "An Article in the San Francisco Bulletin", Aug.2.1903, in the *BTW papers* vol.7, pp.248-251.
18. マーガレットは、1865年ミシシッピ州に生まれ、フィスク大学を1889年に卒業、女子学生部長および女子産業部門長としてタスキージ学院に赴任し、1895年にワシントンと結婚した。
19. タスキージ女性クラブは、1895年、南部を含む全米12州、36の黒人女性クラブとともに「全国黒人女性連合(NFAAW)」を結成し、マーガレットがその初代会長に選ばれた。さらにNFAAWはすでに同様の目的で結成されていた黒人女性連盟(CWL)と1896年に統合され、全米黒人女性協会(NACW)を結成する。マーガレットはNACWの代表に二度選ばれる等、全国的な活躍を見せた。岩本裕子『アメリカ黒人女性の歴史』明石書店、1997などを参照。また、タスキージ女性クラブについては、Jacqueline Anne Rouse, "Out of the Shadow of Tuskegee: Margaret Murray Washington, Social Activism, and Race Vindication", *Journal of Negro History*, Vol.81, Issue1, 1996も参照。
20. *BTW Papers*, vol.8, 1979, p.475.
21. *BTW papers*, vol.6, 1977, p.11.
22. Cynthia Neverdon-Morton, *Afro-American Women of the South and the Advancement of the Race, 1825-1925*, The University of Tennessee Press, 1989, p.133.
23. *BTW Papers*, vol.7, 1977, pp.248-251.
24. *BTW Papers*, vol.9, 1980, pp.291-292.
25. Neverdon-Morton, *op.cit.*, p.135.
26. *BTW papers*, vol.8, pp.480-482.
27. *BTW Papers*, vol.9, p.291.

28. *BTW Papers*, vol.6, p.11.
29. *BTW Papers*, vol.8, pp.475-482.
30. *BTW Papers*, vol.8, pp.479-480.
31. *T.S.*, vol.17, April 28, 1905 / *S.L.*, Vol. X X V, August, 1909.
32. *Catalogue*, 1910-1911, pp.93-94.
33. 詳しくは、成玖美「アラバマ州黒人教育制度化過程」『生涯学習・社会教育研究』第27号、2002を参照されたい。
34. *Catalogue*, 1910-1911, pp.93-94.
35. *T.S.*, vol.17, April 28, 1905.
36. *S.L.*, vol.16, No.12, March, 1900/ *S.L.*, vol.17, No.3, March, 1901/ *S.L.*, vol.22, No.10, October, 1906.
37. *Catalogue*, 1902-1903, pp.46-49 / *Catalogue*, 1905-1906, pp.54-58.
38. Felix, *op.cit.*, pp.67-68.
39. “Summer School for Teacher”, June 20 to July 15, 1910, Tuskegee Institute./ “Summer School for Teacher”, June 14 to July 23, 1915, Tuskegee Institute.
40. *S.L.*, Vol.17, No.3, March, 1901.
41. *S.L.*, Vol.25, No.8, August, 1909.
42. Floris Barnett Cash, *African American Women and Social Action; The Clubwomen and Volunteerism from Jim Crow to the New Deal, 1896-1936*, Greenwood Press, 2001, p.8.
43. *BTW Papers*, vol.3, pp.209-210.
44. *S.L.*, vol.14, No.12, March, 1900/ *T.S.*, Vol.20, No.8, February 22, 1908.
45. *BTW Papers*, vol.5, ppp.95-101.
46. 中條献「黒人大学の社会的機能と役割—ショー大学を中心に、1865—1900」『アメリカ史研究』第11号、1988.